

伝統や文化に関する教育から中華圏に対する理解へ

－国語科・社会科を中心に－

From the Education about Tradition and Culture to the Understanding of Greater China

－Focusing on Japanese and Social Studies－

山田 明広

Akihiro Yamada

要旨

日本では、ここ数年、中華圏からの観光客が大幅に増加し、それに伴って日本側も種々の対策を講じている。しかし、こういった対策をはじめとする日本人の中華圏の人々に対する対応や態度には、多くの問題が見られる。本稿では、まず、日本人の中華圏の人々に対する対応や態度にはいかなる問題があるのか指摘し、こういった問題の最大の要因は我々日本人の多くが中華圏に関する知識や理解に乏しいということであるとの見解を述べた上で、中華圏に対する理解を促進させるにはいかなる教育を行っていく必要があるのか、国語科と社会科を中心に筆者の教育案を提示した。

キーワード：伝統や文化に関する教育、国際理解教育、中華圏、国語科、社会科

I. 伝統や文化に関する教育の充実と国際理解教育

近年は知識基盤社会化およびグローバル化が急速に進んだ時代であり、そして、この社会の変化を受けて、2006年には教育基本法が、翌2007年には学校教育法が、さらに2008年および2009年には学習指導要領が改定されて、「伝統や文化に関する教育の充実」が叫ばれるようになった⁽¹⁾。そして、これ以降、学校教育の現場では、非常に多くの取り組み・指導がなされている。例えば、国語科では、とりわけ古典が重視され、小学校の低・中学年から古典を音読・暗唱するなどして古典に触れ、早い段階から古典に親しんでいく取り組み・指導が行われている。また、大学などの研究機関においても、様々な研究が進められている。

グローバル化が進む中では、「国際理解教育」こそが重要になってくると考えられるが、このように「伝統や文化に関する教育の充実」が叫ばれているその理由について、中央教育審議会答申（2008年1月17日）には、「世界に貢献するものとして自らの国や郷土の伝統や文化についての理解を深め、尊重する態度を身に付けてこそ、グローバル化社会の中で、自分とは異なる文化や歴史に敬意を払い、これらに立脚する人々と共存することができる⁽²⁾」

(1) 伊崎一夫（2014年）「伝統や文化に関する教育の可能性（1）－国語教育のアプローチ」、『人間教育学研究』第2号、178頁。

(2) 文部科学省中央審議会（2008年）「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」、57頁。

とある。つまり、国際理解には、まず土台として自らの国や郷土の伝統や文化についての理解を深め、尊重する態度を身に付ける必要がある、したがって、「伝統や文化に関する教育の充実」が重視されるようになったのである。

一方、「国際理解教育」についても、もちろん全く重視されていないわけではない。「伝統や文化に関する教育の充実」が叫ばれるより以前の1979年の学習指導要領にはすでに国際化への対応が謳われ、また、2002年の学習指導要領には総合的な学習の時間の中に「国際理解」が例示されるなど、早くから種々の施策がなされてきた。そして、これにより、現場レベルでの国際理解教育が従来よりも広がった。

以上が近年の国際化に対応すべく我が国で叫ばれてる「伝統や文化に関する教育の充実」と「国際理解教育」のあらましであるが、管見のおよぶ限り、これらの教育施策はいまだ不十分であると思われる。特に、ここ数年の間に日本で盛んに見られるようになった新しい国際化の動きに対しては、まったくと言っていいほど対処できていないように思われる。

そこで、以下において、まず、ここ数年の間に日本で盛んに見られるようになった新しい国際化の動きとそれにより生じている問題点について述べ、それから、その問題の解決に向けてどのような教育を行っていく必要があるのか、筆者なりの考えを提示したい。

II. 我が国における新たな国際化の動きとその対応における問題点

ここ数年、中国経済の発展や円安、ビザ取得条件の緩和などを背景として、中華圏、とりわけ中国から非常に多くの人々が日本を訪れるようになった。その目的には、留学や就労などもあるが、最も多いのはやはり昨今メディアなどでも盛んに取り上げられている「観光」である。そして、こういった中華圏からの観光客の大幅な増加に伴い、日本側も彼らを迎えるための様々な策を講じている。

特に顕著なのは、観光施設や商店・飲食店などに中国語による案内や看板を設置したり、さらには中国語のできる人員を配置したりするということである。これはもちろん極めて効果的なことであるが、しかし、こういった日本人の対応には問題点も存在する。

すなわち、中国語による案内や看板を設置する場合、主に中国大陸で使用されている簡体字中国語のものだけを設置し、主に台湾や香港で使用されている繁体字中国語のものは設置されないことが多々あるということである。簡体字中国語だと、台湾や香港から来た人々はまったく理解できないというわけではないが、彼らが普段扱わない文字を含んでいるため、どうしても理解しづらい箇所ができてしまう。もしかすると、彼らの中には、繁体字の案内がないということで、自分たちが存在しないものとして扱われたと感じる人さえいるかもしれない。

我々受け入れ側の対応におけるその他の問題点として、中国から来た一部の観光客のマナーの悪さなどのために、中国人に対して差別や偏見・嫌悪といった感情を抱き、それを中国人と思われる人々に対してあからさまに態度に出す人がいるということである。これにより、中国人はもちろん、その他の中華圏の人々も肩身の狭い思いをしている。実際、台湾人の中には、中国人と思われてこのような不利益な扱いをされないよう、極力中国語を話さずに過ごす人もいるという⁽³⁾。

そもそも、台湾人や香港人の多くは、「自分たちは中国人ではなく、台湾人（あるいは香港人）である」といった、いわゆる台湾人（香港人）アイデンティティーを有しており、何もなくとも中国人として扱われるのを疎まし

(3) 『『中国人に間違えられたくない』、訪日台湾人が日本で会話を控える＝中台ネットユーザーの反応は？』、『Record China』2015年12月10日、〈<http://www.recordchina.co.jp/b124816-s0-c30.html#>〉、2018年1月31日アクセス。

く思う傾向にある。にも関わらず、中国人と間違えられてさらに不利益を被るのであれば、なおさら疎ましく思うであろう。そもそも、彼らが簡体字ではなく、今でも繁体字を使い続けているのは、ただ慣れているから、本来の伝統的な文字であるからといった理由だけではない。それによって中国人とは異なるということを主張するためでもあり、すなわち、この台湾人（香港人）アイデンティティーとも大きく関係しているのである。しかし、我々日本人は、こういった点にほとんど配慮することなく、何かにつけて中華圏の人々を一緒にたに中国人として扱ってはいないだろうか。

以上のような問題点、すなわち、

- ①中華圏から来た人々のために、簡体字中国語の案内や看板だけを設置し、繁体字中国語のものは設置しないことが多い。
- ②中華圏から来た人々を一緒にたにすべてを中国人として扱いがちである。
- ③中国人に対して差別や偏見を持ち、それをあからさまに態度に出す人がいる。

は、メディアを含め、我々日本人の多くが中華圏に関する知識や理解に乏しいために生じたものだと考えられる。また、「国際理解」と言うと、国民のほとんどが参加する初等・中等教育の段階では、従来、多くの場合、欧米圏にその矛先が向いていて、アジア圏などにはあまり向いていなかったこともその一因であると考えられる。しかし、中華圏からすでにこれほど多くの観光客が来るようになっており、さらに日本は観光立国を目指しているからには、このまま何もしないわけにはいかず、何らかの全国規模の策を講じる必要があると思われる。今、その一つとして、国民のほとんどが参加する初等・中等教育の段階で中華圏への理解に向けた教育を施すという策が考えられるが、では、どのような教育を施すのが効率的であろうか。

Ⅲ. 伝統や文化に関する教育から中華圏への理解へ

1. 問題点①②について

我々が学校教育において漢字を学習する際に使用するのは、基本的に、1949年に「当用漢字字体表」として示された「新字体」である。古典（古文、漢文）を学ぶ際も、同様に、基本的には「新字体」を用いる。しかし、その原資料は、基本的に「旧字体」で書かれていることから鑑み、伝統や文化に関する教育の一環として「旧字体」にも触れるべきではないであろうか。

そうすれば、この「旧字体」は、中国で戦前まで使用されていた正体字（＝繁体字）と基本的には同じであり、中国だけでなく、日本・韓国・ベトナムなどでも使用されていたこと、戦後、識字率向上を目指して日本と中国では別々に漢字の簡略化が進められ、その結果、日本では「新字体」が、中国では「簡体字」が生まれ、今や一般化していること、中国とは政治体制を別にしている台湾や香港・マカオ、さらには韓国も繁体字を使い続けていること、これらのことにも触れることができる。

さらに、歴史的・政治的観点を加えると、香港や台湾は、戦後数十年間「繁体字」を使い続けることで、「簡体字」を使用している「共産党政権下の中国」を「伝統の破壊者」として非難するとともに、自らを「中国伝統文化の正当な後継者」と主張していたこと、かつての国民党政権下にあった台湾に至っては、さらに、「中国という国家を統治する正統の後継者」とも主張していたこと⁽⁴⁾、そして、ここ10数年ほどは、台湾人・香港人

(4) 菅野敦志（2005年）「台湾における「簡体字論争」—国民党の「未完の文字改革」とその行方—」、『日本台湾学会報』第6号、66-67頁。

アイデンティティーが高揚するにともない、自分たちは「中国」ではなく、「台湾」ないし「香港」であると主張するなど脱中国化が叫ばれており⁽⁵⁾、「繁体字」を使い続ける目的も、それにともなって、自分たちは「中国」とは異なるということを主張するためへと変貌していることにも触れることができる。もし、生徒がこれらの知識を得ることができれば、前述の問題点①②の重要性を認識できうるのではないであろうか。

では、これらのことをどのように教育すればいいであろうか。まず、「伝統や文化に関する教育」の一環として、主として国語科において「旧字体」を取り上げる。そして、その敷衍的事項として、「現在の漢字の字体の種類とその使用地域」についても言及する。次に、これに加えて、社会科（主として世界史）において、「中国・香港・台湾の関係性の歴史の変遷」、および「台湾人・香港人アイデンティティー」を取り上げる。そして、漢字の字体が統一されないことと台湾人・香港人の中国に対する態度・主張との関係性について説明する。こうして、生徒がこれらに関する知識を得ると、前述の問題点①②の重要性を認識させ、改善を促すことができると考えられる。

2. 問題点③について

次に、前述の問題点③についてであるが、これは、

- (1) 一部の中国人の日本におけるマナーの悪さ。
- (2) 中国が各地で領土問題を起こしている。

といった二つの問題と大きく関係すると考えられる。

まず、(1) 一部の中国人の日本におけるマナーの悪さについてであるが、この原因については、学者や評論家などによってすでに活発な議論がなされており、たとえば、「文化大革命の影響⁽⁶⁾」、「都市と地方における教育・所得の格差」、「人口が多く、生存競争が激しい」などといったものが考えられている⁽⁷⁾。そこで、世界史ないし地理の授業においてこれらを取り上げるとともに、

- ・我々日本人もかつて70年代には同じであった。
- ・中国政府が主導で対策を講じ始めており、改善しつつある。

といったことにも触れ、嫌悪感を抱くのではなく、理解としばらくの忍耐を生徒に求めるようにするのがいいのではないであろうか。

次に、(2) 中国が各地で領土問題を起こしている、についてであるが、これについても評論家などによってすでに活発な議論がなされている。そして、その多くのものは、この原因を「中華思想」に帰している⁽⁸⁾。報告者は、中華圏の理解に向けての教育を進める上では、この原因を突き詰める必要はないと考える。それよりも、こういった領土問題は中国という「国家」が引き起こしているものであり、中国の国民全員が国家のこの動きに賛同・加担

⁽⁵⁾ 「去中国化+台湾認同高漲 美學者點出中國憂慮...」、『自由時報』2016年3月3日、〈<http://news.ltn.com.tw/news/politics/breakingnews/1619871>〉、2018年1月31日アクセス。

⁽⁶⁾ 文化大革命の影響としては、さらに、儒教の「礼」をはじめとする伝統文化思想の破壊、高等教育の機能停止などが考えられる。孫樹林(2016年)「中国人はなぜ、今こうなったの?」、『THE EPOCH TIMES』2016年4月20日、〈<http://www.epochtimes.jp/2016/04/25529.html>〉、2018年1月31日アクセス、赤沼 悠介(2012年)「【中国人に聞いた Vol.2】なぜ、中国人は孔子を忘れてしまったのか?」、『オルタナティブ・ブログ』2012年1月23日、〈http://blogs.itmedia.co.jp/global_reseach/2012/01/post_6.html〉、2018年1月31日アクセスなどを参照。

⁽⁷⁾ たとえば、注6前掲記事のほか、「中国人のマナーはなぜ悪いといわれるのか・トイレ・食事のマナー」、『Tap-biz』2017年12月1日、〈https://tap-biz.jp/tap_cat_100401/tap_cat_100406/1020945〉、2018年1月31日アクセスなどで議論されている。

⁽⁸⁾ たとえば、「中国が領土に固執するのはなぜか 中華思想2千年の「大一統」の呪縛とは…」、『産経ニュース』2016年7月12日、〈<http://www.sankei.com/world/news/160712/wor1607120039-n1.html>〉、2018年1月31日アクセスなどがある。

しているわけではなく、むしろ国民はほとんど関係がない。したがって、中国が各地で領土問題を起こしているという現状をもって中国人に嫌悪感を持つべきではないと教育すべきだと考えている。

IV. 中華圏への理解に向けた教育案—おわりにかえて—

以上、まず、ここ数年の間に日本で盛んに見られるようになった新しい国際化の動きとして中華圏からの観光客の大幅な増加とそれに対する日本側の対策について述べ、そして、それによりいかなる問題点が生じているか指摘し、その原因として我々日本人の多くが中華圏に関する知識や理解に乏しいということを挙げた上で、中華圏に対する理解を促進させるにはいかなる教育を行っていく必要があるのか、筆者の考えを述べてきた。最後に、上で述べてきた中華圏への理解に向けた教育案をその過程順にまとめて示すことで、本稿の締めくくりとしたい。

- 1) 「伝統や文化に関する教育」の一環として国語科において「旧字体」を扱う。
- 2) 社会科（主として世界史）において、「中国・香港・台湾の関係性の歴史的変遷」、および「台湾人・香港人アイデンティティー」を取り上げる。
- 3) 世界史ないし地理において中国の「文化大革命」、「都市と地方における格差問題」、「人口問題」扱うとともに、国家と国民を分けて考えるよう教える。

筆者は「中華圏への理解に向けた教育」という課題に取り組み出してまだまだ日が浅く、上で示した教育案もまだまだ相当多くの問題点を含む、到底実践には向かないものであるかと考える。今後、初等・中等教育の現場に立つ教員などとも手を組んで共同で研究するなどして、実践に耐えうるものとなるまで改善していきたい。いずれにせよ、「中華圏への理解に向けた教育」が少しでも早く教育現場において実際に実施されるようになり、日本人の中華圏に対する国際理解が進み、中華圏の人々に対する偏見や差別的扱いが根絶されることが切に願われる。

【引用・参考文献】

- ・菅野敦志（2005年）「台湾における「簡体字論争」—国民党の「未完の文字改革」とその行方—」、『日本台湾学会報』第6号
- ・文部科学省中央審議会（2008年）「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」
- ・赤沼 悠介（2012年）「【中国人に聞いた Vol.2】なぜ、中国人は孔子を忘れてしまったのか?」、『オルタナティブ・ブログ』2012年1月23日、〈http://blogs.itmedia.co.jp/global_research/2012/01/post_6.html〉、2018年1月31日アクセス
- ・伊崎一夫（2014年）「伝統や文化に関する教育の可能性（1）—国語教育のアプローチ」、『人間教育学研究』第2号
- ・孫樹林（2016年）「中国人はなぜ、今こうなったの?」、『THE EPOCH TIMES』2016年4月20日、〈<http://www.epochtimes.jp/2016/04/25529.html>〉、2018年1月31日アクセス
- ・「『中国人に間違えられたくない』、訪日台湾人が日本で会話を控える = 中台ネットユーザーの反応は?」、『Record China』2015年12月10日、〈<http://www.recordchina.co.jp/b124816-s0-c30.html#>〉、2018年1月31日アクセス
- ・「去中國化+台灣認同高漲 美學者點出中國憂慮...」、『自由時報』2016年3月3日、〈<http://news.ltn.com.tw/news/>

politics/breakingnews/1619871)、2018年1月31日アクセス

・「中国が領土に固執するのはなぜか 中華思想2千年の「大一統」の呪縛とは…」、『産経ニュース』2016年7月12日、〈<http://www.sankei.com/world/news/160712/wor1607120039-n1.html>〉、2018年1月31日アクセス

・「中国人のマナーはなぜ悪いといわれるのか・トイレ・食事のマナー」、『Tap-biz』2017年12月1日、〈https://tap-biz.jp/tap_cat_100401/tap_cat_100406/1020945〉、2018年1月31日アクセス